東日本大震災復興支援ツアー　ＪＴＢＯＢ会関東支部

観光旅行での訪問こそ支援の第一歩

きずな地蔵（左手奥）の前で下車、荒廃した被災地を目の当たりにする。将来は公園整備の計画も

経済波及効果に期待
記憶風化防ぐ持続性の切り札

東日本大震災は、発生から3年1カ月が経過した。被災地は、復興半ばというより傷跡を生々しくとどめている地域も少なくない。そうした現実と裏腹に、早くも風化が懸念される。一方、教訓として伝えようとする動きも少なくない。そうした中、ＪＴＢの退職者で組織するＪＴＢＯＢ会関東支部（榎本宗輔支部長）は、3月24～25日に福島、宮城両県へ東日本大震災復興支援ツアーを実施し、約200人が参加。観光旅行を通した復興への寄与を、具体的な形で示した。【編集委員・泉朝雄】

東日本大震災からの復興は、被災地だけの課題ではない。どれだけ多くの人間が、これからも関心を持ち続けられるかに、「日本の今後がかかっている」と指摘する声が出始めている。その一つには、南海トラフなど予測される大震災への、物心両面の備えに欠かせない教訓だからだ。

指摘を裏返せば、生かされねばならない教訓であるにもかかわらず、大震災から3年を経過した時点で、すでに風化が始まっていることへの懸念が見え隠れする。ネット上では、「ＡＫＢのブームは続くのに、復興ボランティアのブームは早くも終わった」などの書き込みが少なくない。

また、震災直後は、いわゆる自粛ムードが日本中に蔓延（まんえん）し、観光旅行を口にできる状況ではなかった。だが、こうした旅行の自粛は、多分にシンパシー（感情移入）よる「可哀想だ」との同情論がベースだった。

しかし、本当に必要なのは、「自分が被災者の立場だったら」と置き換えるエンパシー（自己移入）だと指摘する声が、多少の落ち着きを取り戻した頃から出始めていた。それを裏付けるように、エンパシーにつながる「絆」がさまざまな場面で用いられた。

だが最近は、それにも多少の陰りが見えている。そうした現象は、東日本大震災が被災地に残した教訓に、改めて目を向ける時が来ていることを、示唆しているともいえる。被災地や被災者として語り継ぐ姿勢と同時に、被災をしなかった地域や人々は、真摯（しんし）な態度で耳を傾け続けることだ。

この持続性を現実の姿に落とし込んだ場合、観光旅行で被災地を訪れることや、語り部の話を聞くことが極めて現実的な行為となる。さらに、観光旅行は、被災地での食事や宿泊、土産品の購入などが必ず伴う。観光の経済波及効果は、極めて多岐にわたる。それは、支援活動に直結する。

今回ＯＢ会が実施した復興支援ツアーは、まさしくそれらを具体化したものだ。副支部長の茂原史則氏は言う。

「私たちは、ＪＴＢマンとして長年旅行に携わってきた人間ばかりの集団だ。旅行には、二つの側面がある。一つは旅行を楽しむ人々が満足感を得ることであり、もう一つは旅行先となる地域に多くの経済効果がもたらされることだ。その意味では、被災地を訪ねることによって、復興の機運を高め、さらに持続させる活動につなげたい」

ツアーバスのガイドは、到着する先々の特産品や銘菓などの土産品情報をきめ細かく紹介。参加者も土産購入に余念がなかった。それが今回のツアーを象徴する一場面と言えなくもない。

語り部の話と復興の現実を直視する

教訓は未来を拓く礎
年齢や男女を超えた観光目的

東日本大震災の傷跡は、いまなお被災地域の随所に生々しく残っている。被災地への観光旅行は、自然災害の恐ろしさを知るとともに、そこに秘められた教訓から何かを学び、感じとることで将来に生かされる貴重な経験となる。

とりわけ語り部の話を聞くことは、学校の教育旅行だけでなく、老若男女の各年齢層にも幅広く受け入れられる貴重な要素をもっている。その意味では、被災地への旅行は、価値ある旅行目的であり旅行先といえる。

今回のツアーでは、石巻市で語り部から当時の状況を聞くとともに、復興の現状を自らの目で確かめることに主眼が置かれていた。同市は、震災で死者3523人と行方不明者438人の甚大な被害を被っている。

話を聞く会場となった石巻市のプレナホールは、この地域で地震による倒壊や津波による流失を免れた数少ないホールだという。だが、内部の白い壁面は、大人の首ほどの高さでわずかに変色している。浸水したことを物語っている。

語り部は、みらいサポート石巻（一社）が推進している「地域づくり支援事業」の一つ。「東日本大震災の記憶を全国の人々に伝承することも復興支援」とのスタンスで事業展開をしている。

今回ツアーでの語り部は、津波で母を亡くした佐藤富蔵氏。同氏は、自宅で被災した。

「午後2時46分、激しい揺れは2回にわたり3分間以上も続いた。津波を知らせる行政無線は裏山に反響して聞き取れない。サイレンの音だけが不気味だった。室内のあらゆるものが倒れた」

「私は津波を直感し、母に『津波だ、逃げるぞ』と叫び2階に上がり、貴重品をバッグに詰めた。玄関を出ると水は、もう足首まで来ていた」

この後、同氏は水との壮烈な死闘を続け、母親と2人で辛くも寺院に避難できた。だが、その母親は翌日、激しくせき込んだ後に亡くなった。水の難は逃れたものの、低体温症が死因だった。後日、同氏は避難所で低体温症にかかった高齢者が、周囲の人間に手で擦られているのを見た。低体温症は、回復装置がなくても対処できる。それを知らなかった自身の不明を悔いたという。

「津波を甘くみてはいけない」と強調する同氏は、同時に正確な情報が、いかに大切かを語った。首からさげた小さな携帯ラジオを示し「イヤホン式だから小さな電池でも長時間聞ける」とさり気ない口調。だが、そこには、命という最大の重みを支える教訓が込められていた。

ツアーでは、ホールで語り部の話を聞いた。さらに、同市湊地区を中心にバスで巡った。

バスに同乗した語り部から耳にする当時の実話は、まさに鬼気迫る内容が背筋を震撼させる。また、車窓には礎石だけを残した住宅の跡地、骨組みだけとなったショッピングセンターの残骸、壊れた自動車の重なり合う光景などが展開する。それは、理解も想像も超えた巨大な自然災害が、現実に起きた事実を如実に物語っている。

土地は復興され、痕跡は消える。だが、この教訓は、風化させず千年先まで語り継ぐものだ。

ツアー２日目のハイライト、石巻で語り部の話を聞く

礎石だけの被災家屋（車窓から）

ショッピングモール跡、再興のめどは未定とか（車窓から）

松島では随所で津波の高さを示す表示を見かける（右は観光船乗り場横の漁協直売所内、左は土産店の店頭）

夕食まで約2時間の講演会（女将のほか農園経営の吾妻一夫社長が登壇）

講演する女将の畠さん

お客さまの命を守る
旅館のもてなし、避難者の癒し

東日本大震災では、多くの旅館が罹災した。一方で、二次避難者を受け入れる旅館も全国に及んだ。今回のツアーでは、そうした旅館の一つ、福島県の穴原温泉「匠のこころ吉川屋」に投宿した。同館女将の畠ひで子さんから、二次避難者の受け入れをはじめ、当時の話を聞くのが狙いだ。

震災の発生時、同館の対応は素早かった。これは、震災発生からわずか20分後には、「お客さまの避難完了」をツイッターにアップしたことでもうかがえる。女将は言う。

「旅館はお客さまの命を守るところ。万一に備えた防災組織を編成しており、社長をトップに従業員全員の役割分担、持ち場がきまっている。また、万一の場合に、体が自動的に動けるよう年間に6回の訓練を行い、教育の徹底に努めている」と。

地震発生の午後2時46分といえば、従業員の多くが「中抜け」の時間帯だ。それでも120人の連泊客を無事に避難誘導した。「ロビーでラジオを聞きながら、時折襲ってくる余震で不安な夜を過ごした」と女将。

そして、この連泊客120人は、大型バス2台を手配して翌日には東京へ無事に送り届けることができた。

地震のあった3月中は休業したものの、4月からは二次避難者の受け入れを開始した。警視庁の警官の仮宿舎にもなった。飯坂温泉では、南相馬からの避難者2300人ほどを受け入れ、同館では1000～200人を数えた。館内には一般客と避難者、そして警察関係者が混在した。

「避難をされた方々は、何の落ち度もないのに避難を余儀なくされたもの。やり場のない怒りが、旅館の従業員に向けられることもあった」と女将は述懐する。

そこで、館内のバーを談話室に開放し、くつろげる空間を提供した。さらに、ルールとマナーを守る避難生活を提案し、避難者もこれに従って和やかな日々を過ごした。

女将の心配りと旅館の温かいもてなしは、被災者を癒す大きな力となった。

二次避難者に過ごし方を提案

忘れてはならないこの大震災　語り伝えることで守られる日本の絆